

『大阪言語学会要覧』について—日本言語学史拾遺(1)

長田 俊樹

1. はじめに

石濱純太郎は著名な東洋学者である。

その蔵書は石濱文庫として、現在大阪大学図書館に収められている。石濱純太郎没後50周年を記念して、2018年に国際シンポジウム「東西学術研究と文化交渉」が開催され、その時の発表をまとめた論文集が2019年に刊行されている(吾妻重二編2019)。

その論文集に、「石濱純太郎年譜略 補訂版」(吾妻重二2019)が掲載され、その年譜に「昭和十七(1942)年二月 大阪言語学会を創立発会す」とある。しかし、その論文集では、大阪言語学会がどんなものだったのか、一切記載がない。つまり、大阪言語学会が石濱純太郎によって創立発会した以外、研究会の内容などは一切あきらかになっていない。筆者は「石濱シュレーに集う人々」と題する別稿<sup>1</sup>で、大阪言語学会の一端をあきらかにしたが、その全容をあきらかにしたとは到底いいがたい。

そんなとき、姉から『大阪言語学会要覧』(以下、要覧と記す)というのが父の遺品の中に見つかったと連絡をもらい、その要覧を送ってもらった。驚いたことに、大阪言語学会の研究会の日時が発表者、発表題名とともに、記されている。そこで、ここにその要覧を紹介し、大阪言語学会でどんな発表が行われていたのかについて、述べてみたい。

なお、KOTONOHAでは「日本言語学史外伝」の連載を企画しているが、外伝は人物にあてて述べるのに対し、この大阪言語学会などの活動については「日本言語学史拾遺」と題して論じていきたい。

2. 大阪言語学会会則

要覧は昭和24(1949)年4月と表紙に日付がある。全部で10頁で、1頁に会則が掲載され、2-6頁に研究例会が日時とともに発表者と題名が載っている。7頁には川崎直一による備考があり、8-10頁が会員名簿である。

まず、会則からみていこう。

大阪言語学会の会則

1. 本会は大阪言語学会 (Societas Osaka'ensis Studiorum lingarum) と称す。

2. 本会の目的は世界諸言語の研究に在り。

3. 本会は本会の趣旨に賛成する大阪付近在住の者を会員とす。

入会せんと欲する者は幹事に許可を求められたし。

退会せんと欲する者は幹事迄届出られたし。

当会員に非ざる者も幹事の許可を得て会友として例会に出席するを得。

<sup>1</sup> 長田俊樹(印刷中)「石濱シュレーに集う人々」。現在、国際日本文化研究センターの紀要である『日本研究』に投稿し掲載が決まった段階である。

4. 本会は幹事二名を置き事務を処理せしむ。その任期は一年とし重任するを得。幹事の推挙は総会出席者による選挙多数決に依るものとす。
5. 本会の事業は概ね次の如し。
  - (イ) 総会 年度の初めに総会を開き事業報告役員選挙を行う
  - (ロ) 例会 研究発表のため例会を開く。毎月の第二日曜日午後を通例とす。三月、七月、八月、十二月は例会を開かず
  - (ハ) 出版 事業報告名簿； 言語関係の編著等
6. 会費は年百円とす。会費は入会と同時に一年分払込むものとす。会費は返却せず。滞納一年以上に及べば退会せるものとす。
7. 会則の変更は総会に於て出席会員の過半数の決議によるものとす。

以上が会則全文である。

会則にコメントを加えておこう。

まず、目的が「世界諸言語の研究」というのに驚かされる。また、会員は「大阪付近在住の者」と限定されている。同じく石濱純太郎が設立した「静安学社」の会友は中国人学者やロシア人学者などを含む、世界的規模だったのとは好対照である。例会は「毎月の第二日曜日午後を通例」とあるが、実際の例会は必ず第二日曜日と決まっていない。実際の例会をみるかぎり、一月、二月も例会は開催されていない。

### 3. 大阪言語学会研究例会

続いて、要覧には研究例会が掲載されている。

いくつかまちがいがみられるため、それを訂正しながら、また『英語青年』誌に掲載された大阪言語学会の活動報告と照らし合わせながら、例会のすべてを以下に記す。

#### 創立総会並 第一回例会

昭和十七年二月十五日 懐徳堂にて

石濱純太郎<sup>2</sup> ツングース語族に就いて

川崎 直一 日本語で書かれた泰語独習書

昭和十七年五月十七日<sup>3</sup>

川崎 直一 エストニア語概説

舛田 武雄 蒙古字改良案をよんで

昭和十七年六月二十一日<sup>4</sup>

<sup>2</sup> 長田(印刷中)では石濱純太郎の表記は旧漢字を使っているが、この『大阪言語学会要覧』では石濱純太郎と表記されているため、それにしたがった。

<sup>3</sup> 『英語青年』Vol.87 No.6によると、「五月十七日午後一時から大阪高津中学校で第二回例会を開き」(189頁)とあり、お二人の発表後、「現下の国語国字問題」について討議して、夕刻散会した」と記されている。

<sup>4</sup> 『英語青年』Vol.87 No.8によると、「六月二十一日午後大阪高津中学校で第三回例会を開いた」(254頁)とあり、五島の発表のあと、「山田房一氏編「言語関係刊行書目」の新刊紹介もあつた。山

- 五島 忠久 バンツ一語について  
昭和十七年九月二十日<sup>5</sup>  
進藤静太郎 発表後十年時代のエスペラント  
宮武 正道 日本で出版されたマレー語の本について  
昭和十七年十月二十日<sup>6</sup>  
岡崎 精郎 高昌行紀に就て  
舛田 武雄 契丹文字  
高橋 盛孝 パレオアジア語及びアメリカ語に於ける接詞について  
昭和十七年十一月十五日<sup>7</sup>  
中井 玄英 言語構成観と言語過程観  
広瀬<sup>8</sup> チョオサアの夢  
昭和十八年四月十八日<sup>9</sup>  
石本 健 ハンガリー語について  
国分 敬治 ギリシャイオニア方言  
舛田 武雄 蒙古錢とパスパ文字  
昭和十八年五月十六日  
石浜純太郎 元朝秘史の音訳  
昭和十八年六月二十日<sup>10</sup>  
奥村正太郎 新日本表音文字  
泉井久之助<sup>11</sup> 仏印を見て  
昭和十八年九月二十六日  
石浜純太郎 ギリヤク語の研究と高橋先生の素顔

---

田氏が編した書目は国語学を始め英、独、仏、支、蒙古、印度等の言語に関して明治元年から昭和十七年一月の間我国で発行された書目の録で、山田氏が自費で五百部出版、各方面へ寄贈したものである。しかし書目には大分漏れた冊子もあるさうである(254頁)との記載がある。

<sup>5</sup> この例会は要覧には掲載がなく『英語青年』Vol.88 No.2によると、お二人の発表のあと「宮武氏著「マレー語」の合評を行ひ、又石浜純太郎氏著「メラネシア語派の研究」のパンフレットの配布を受け夕刻散会した(62頁)とある。

<sup>6</sup> 『英語青年』Vol.88 No.4によると、「第五回例会を十月二十五日午後一時より大阪懐徳堂で静安学社と合同して開催した(125頁)とある。ネットで検索すると十月二十五日が日曜日で、この『英語青年』掲載の日時が正しいと思われる。静安学社については長田(印刷中)を参照。

<sup>7</sup> 雑誌『コトバ』昭和18年1月号のコラム「コトバ情報(61-67頁)によると、「大阪言語学会1942年11月15日午後1時から高津中学で「言語構成論と言語過程説(中井玄英)などの講演があった」とある。

<sup>8</sup> 関西大学の学長を務めた廣瀬捨三のことか。彼の蔵書は廣瀬文庫として関西大学に収められているが、チョーサーは廣瀬の専門とするところで、チョーサーの本も廣瀬文庫には収められているという。和田葉子(2008)「廣瀬文庫とチョーサーをめぐる本たち」を参照。

<sup>9</sup> 『英語青年』Vol.89 No.4によると、「四月十八日午後一時から高津中学校で例会を開き(94頁)とある。

<sup>10</sup> 『英語青年』Vol.89 No.8によると、「六月二十日午後一時より静安学社と合同で例会を懐徳堂に開催し次の講演を聴いた(190頁)と報告されている。

<sup>11</sup> 要覧では「宗井久之助」と誤記されている。

川崎 直一 岡倉賞について<sup>12</sup>  
高橋 盛孝 ギリヤク語とその文献  
展 観 ギリヤク語研究資料

昭和十八年十月二十四日

国分 敬治 我国に於けるプラトン研究に対する一つの反省  
石浜純太郎 劉猷廷の言語学

昭和十八年十一月二十一日

石浜純太郎 勞乃宣の言語学  
舛田 武雄 元朝秘史に見ゆる色に就いて

以上、第二次世界大戦中までの研究例会一覧である。戦火が激しくなっていた昭和十八(1943)年十一月まで研究例会が開催されていたのは驚きである。さすがに、1944年、1945年は休会しているが、1946年4月には例会を再開している。引き続き、戦後の例会をみていこう。

昭和二十一年四月二十一日

この例会については要覧には記録されていないが、『英語青年』Vol. 92(6)に「二年間休会してゐたが四月二十一日午後、大阪市四天王寺本坊で例会を開いた。幹事石浜純太郎氏から会務の報告があり、今後毎回研究発表の例会を行ふことに決議した」(191頁)とある。

昭和二十一年五月十二日

石浜純太郎 シロコゴロフのツングウス字典  
伴 康哉 セム語の語根に就いて

昭和二十一年六月九日

石浜純太郎 シナの梵語学  
芝田 稔 シナの声韻学研究<sup>13</sup>

昭和二十一年九月十五日

石浜純太郎 中国の暹羅語学  
伊地智善継 中国語名詞の接尾辞 児と子<sup>14</sup>

昭和二十一年十月十三日

富田竹次郎<sup>15</sup> 暹羅帰朝談  
展 観 西夏文法華経展観 解説 石浜純太郎

昭和二十一年十一月十日<sup>16</sup>

<sup>12</sup> 要覧では「岡倉 について」と「賞」が抜けている。

<sup>13</sup> 『英語青年』Vol.92 No.9によると、芝田稔の発表題目は「シナの音韻研究」(287頁)とある。

<sup>14</sup> 『英語青年』Vol.92 No.11によると、「九月廿五日天王寺高女で例会を開き」(351頁)とあるが、九月十五日が日曜日なので、要覧の方が正しいのかもしれない。また、伊地智善継の発表題目は「中国語名詞の指小辞」とある。

<sup>15</sup> 要覧では「富田次郎」と誤記。

<sup>16</sup> 『英語青年』Vol.93 No.1によると、「十一月十日天王寺高女で十一月例会を開催、石浜純太郎氏蔵梵文阿弥陀経諸本展観、村田忠兵衛氏「ブラハトデヴタに現れた文法観念」の講演があつた」(63頁)とある。村田忠兵衛のタイトルにある「ブリハドデーヴァター」(要覧が正しい)は *Bṛhaddevatā*

- 展 観 梵文阿弥陀経展観 解説 石浜純太郎  
 村田忠兵衛 ブリハドデーヴァターに於ける語法思想  
 昭和二十二年四月十三日  
 石浜純太郎 Asia Polyglotta に就いて  
 三上 章 敬語法について  
 昭和二十二年五月十一日<sup>17</sup>  
 山岸 光雄 アメリカ英語の歴史  
 舛田 武雄 アフガニスタン蒙古語考  
 松原 八郎 ビルマ帰還談  
 昭和二十二年六月八日  
 石浜純太郎 緬甸訳語  
 三上 章 浜田「古代日本語」について  
 川崎 直一 服部四郎式ローマ字案について  
 川崎 直一 市河三喜博士記念論文集について  
 昭和二十二年九月十四日  
 蛭沼 壽雄 ギリシア語概観  
 井上 修 漢字の起源とその発展  
 展 観 甲骨文字展観 解説 石浜純太郎  
 昭和二十二年十月十二日<sup>18</sup>  
 岸本 通夫<sup>19</sup> ヒッタイト語概説  
 村田忠兵衛 パーニニの音論二三  
 昭和二十二年十一月九日  
 伴 康哉 アラビア語の数詞  
 岸本 通夫 続ヒッタイト語概説  
 昭和二十三年四月十一日<sup>20</sup>  
 川崎 直一 ノヴィアールについて  
 山岸 光雄 イエスペルセンの three-rank 説批判

---

のことで、文法書ではないので、要覧の「語法思想」が正しい可能性が高い。

<sup>17</sup> 『英語青年』Vol.93 No.8によると、「五月十一日午後一時より天王寺高女に於て例会を開き、次の講演を聴いた」として、「アメリカン英語の史的考察 山岸光雄」(286頁)とあり、タイトルが若干異なる。

<sup>18</sup> 『英語青年』Vol.94 No.2によると、「昨年九・十・十一月の夫々第二日曜日に天王寺高女にて例会を開き十・十一月は大阪印度学会と合同した」(62頁)とある。大阪印度学会については詳細は不明。

<sup>19</sup> 要覧では岩本通夫と誤記されている。続く十一月九日の発表者も岩本通夫と誤記されている。なお、要覧の会員名簿には岸本通夫の名前はない。

<sup>20</sup> 『英語青年』Vol.94 No.6によると、「四月十一日(日)午後一時より大阪天王寺高女にて総会を開き、下記の講演をきいた」とし、発表題目と発表者は「The Criticism of Jespersen Three Ranks and A New Classification of Parts of Speech Based upon the Yin-Yang Principle 京大文学部 山岸光雄氏。Novial について 大阪外専教授 川崎直一氏」(190頁)とある。山岸光雄の発表題目は要覧とはかなりことなるが、こちらがより正確だと思われる。

昭和二十三年五月九日

辻本 春彦 王力の中国語についての新著  
石浜純太郎 金剛経展観と解説  
川崎 直一 新刊紹介

昭和二十三年六月十三日

田中 四郎 エリアスの *English-Arabic Dictionary* の新版  
伴 康哉 アラビア語の接続法  
石浜純太郎 久野文書研究予報

昭和二十三年十月十日

三上 章 国語の現在動詞  
森 一郎 ローマンス語 雑考

昭和二十三年十一月十四日

稲葉 正就 西蔵語について  
石浜純太郎 西蔵語文法書展観

以上が、この要覧が出版されるまでの研究例会の日にちと発表者、発表題目である。

ここからは父の手元にあった資料を参考にして、昭和二十四(1949)年以降の研究例会について、わかっている範囲で述べておこう。

1949 (昭和 24) 年 9 月 11 日<sup>21</sup>

長田夏樹 トルコ・モンゴル比較言語学方法論について

1949 (昭和 24)年 10 月 9 日<sup>22</sup>

高橋盛孝 ギリヤク語の新しい資料  
長田夏樹 原始日本語の音韻とアクセントに就いて  
高倉克己 支那語法について

1951(昭和 26) 年 4 月 22 日<sup>23</sup>

---

<sup>21</sup> この研究会については川崎直一からのハガキによっている。それによると、「9月11日(日)大阪言語学会で『トルコ・モーコ比較言語学』お願いします」とある。ここの題名は長田礼子編「長田夏樹年譜」によった。この年譜は愛知県立大学の以下のサイトからダウンロードできる。

<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf9/nenpu.pdf>

<sup>22</sup> この研究会は大阪言語学会の案内ハガキが父の遺品の中にあり、その案内ハガキによった。

<sup>23</sup> この研究会はウラル・アルタイ学会、静安学社との共同研究会である。父の手元には大阪言語学会(OG)以外のウラル・アルタイ学会(UA)と静安学社(SA)から別々の案内ハガキがあり、それぞれ講演題名が若干ことなる。石濱の講演題名は「ラムステット博士の著書について」(OG)「ラムステットの著書の解説と展観」(UA)、「ラムステットの著書展観と解説」(SA)、西田は「古代アルタイ語法私見」(OG)「古代アルタイ語学」(UA、SA)、石本は「フィノ・ウグリヤ諸語における尸替の痕跡」(OG)「フィノ・ウグリヤ諸語に於ける尸替の痕跡」(SA)「題未定」(UA)、長田夏樹(OGの案内では長樹と誤植されている)は「題未定」(OG)「アルタイ比較言語学創始者の一人としての博士を偲ぶ」(UA)「蒙古語とトルコ語」(SA)となっている。父によると、UAでの題名が実際の講演タイト

川崎直一 ラムステット博士をしのぶ  
石浜純太郎 ラムステットの著書展観と解説  
西田龍雄 古代アルタイ語学  
石本健 フィノ・ウグリヤ諸語における尸替の痕跡  
長田夏樹 アルタイ比較言語学創始者の一人としての博士を偲ぶ

#### 4. 要覧備考と大阪言語学会の発起人たち

続いて、要覧には「備考」があるので、そちらを掲載する。

##### 備考

昭和23年12月5日 関大天六校舎において 静安学社主催の石浜純太郎還暦祝賀茶話会に本会も合流した。

昭和23年秋神戸言語学会が創立されたとき、大阪言語学会の名で 幹事川崎が祝辞をのべた。

本会は石浜純太郎の主唱により 石浜 川崎直一 五島忠久を発起人として創立にいたったものである。

幹事は創立から昭和22年度まで石浜 川崎の二人が当たってきたが、昭和23年から川崎 松原となった。

研究例会は、懐徳堂、高津中学、天王寺本坊、天王寺女学校 その他などで行われたが、昭和24年4月からは大阪市天王寺区上本町八丁目 大阪外専で行う予定。

会の記録一部紛失のため、初期の研究例会の記事を十分伝えることができない。(例えば、進藤氏の「エスペラントについて」の講演時期。)

現在事務所 大阪住吉区万代東 川崎 直一 方

以上、備考である。この後、会員名簿があるが、煩雑になるので、ここでは名簿は掲載しない。

この備考には重要なことが記されている。まず、本会は「石浜純太郎の主唱」によって設立したとある。これは石浜の年譜に書かれているとおりである。発起人が「石浜 川崎直一 五島忠久」の三人だったことはこれまで知られていない。幹事は戦前は「石浜 川崎」の二人だったが、昭和23年からは「川崎 松原」の二人になっている。なお、「進藤氏の「エスペラントについて」の講演時期」は『英語青年』誌に掲載されているので、そちらにしたがって追加しておいた。

では、大阪言語学会の発起人たちをみておこう。

石浜純太郎(1888-1968)については有名なので、改まった紹介は必要なかろう<sup>24</sup>。

冒頭でみた「石浜純太郎年譜略 補訂版」によると、「1923年6月 大阪東洋学会を創設し、1927年9月 静安学社を発起し」、そしてこの大阪言語学会を創設している。また「1953年 日本西蔵学会会長に推薦」され、数々の学会創設に関わってきたが、大阪東洋学会や静安学社の実態は意外とわかっていない。これら学会以外にも、ウラル・アルタイ学会や浪華芸文会の設立にもかかわっているが、年譜には記載がない。父の遺品の中にはこれら学会に関わる資料もあるので、これらの学会や研

---

ルだという。それぞれの中から、妥当と思われる題名をあげておいた。

<sup>24</sup> 長田 (印刷中) でかなり触れたので、詳細はそちらをみていただきたい。

研究会についてもいずれ論じてみたい。

この要覧をみるかぎりにおいては、石濱は大阪言語学会での発表として、戦前行われた 12 回の会合のうち 5 回で発表し、戦後行われた 17 回の会合のうち 6 回で発表し、4 回は展覧と題して展示の解説などをおこなっている。

川崎直一(1902-1991)は変わった履歴の持ち主である。

父の手元にある資料によると、石濱の母校でもある市岡中学を出た後、1921 年早稲田大学仏文科に入学するも病気で中退し大阪に戻る。1932 年大阪外国語学校ドイツ語部別科修了後、1935 年にはロシア語部選科卒業、1937 年にはシナ語部別科修了と次々と言語を習得し、1944 年には大阪外事専門学校でアラビア語の辞典編纂を手伝う嘱託となり、戦後、1947 年、大阪外事専門学校教授となった後、1949 年には新制大阪外語大学教授となった。この『大阪言語学会要覧』出版時はちょうど大阪外事専門学校教授から大阪外国語大学教授になるころだったことがわかる。エスペランチストとして名高く、典型的なポリグロットであり、大阪外国語大学で担当した授業は言語学、ロシア語、ビルマ語、ギリシア語、ラテン語、エスペラント語である。

川崎の発表をみても、その関心の広さに驚かされる。第 1 回では「日本語で書かれた泰語独習書」第 2 回では「エストニア語概説」とある。アジアの声調言語であるタイ語とヨーロッパの屈折言語であるエストニア語は地域もちがうし、系統もことなる。戦後の発表で取り上げているのは、言語学者イェルペルセンが開発した国際補助語ノヴィアール(現在ではノヴィアルと表記されるのが一般的)である。エスペランチストとしての関心から取り上げたのであろう。

もう一人の発起人である五島忠久(1910-2010)についてみておこう。

五島は大阪に生まれ、天王寺中学、浪速高校を卒業後、1932 年に東大言語学科に進み、大学卒業後は千葉県で中学校の教員を務めた後、大阪に戻り、大阪言語学会設立時は高津中学校で教諭を務めていた。戦中の大阪言語学会が高津中学校で行われていたのは五島が勤めていたからであろう。戦後すぐ浪速高校教授となった後、1949 年 6 月から大阪大学助教授、1956 年教授を経て、1972 年 3 月大阪大学名誉教授。2010 年に亡くなっている<sup>25</sup>。

第 3 回例会で、「バンツ語について」と題する発表を行っているが、アフリカのスワヒリ語に関心を寄せてきた。1944 年にアリス・ワーナー著『アフリカ諸言語の構造と関係』を翻訳出版したのを始め、『スワヒリ語文法』(1972 年、大学書林)や『アフリカ語の話』(1983 年、大学書林)を出版している。ただし、スワヒリ語を専門とする中島久大阪大学名誉教授によると、五島は実際にフィールドワークを行ったわけではなく、英語で書かれたものをまとめただけだという。1970 年『0 歳からの英語教育』を刊行し、1980 年には日本児童英語教育学会を自ら設立し、英語教育、特に子供の英語教育に関する著書も多い。

## 5. 大阪言語学会例会での発表者たち

発起人以外の発表者のうち、こちらで調べがかった人々についてみておこう。

まず、戦前行われた例会での発表者からみていこう。第二回で発表している舛田武雄についてはまったくわからない。この要覧の名簿にも所属が記されていない。進藤静太郎(1902-2004)はエスペラン

---

<sup>25</sup> 五島の経歴については菅真城、阿部 武司(2010)「五島忠久名誉教授に聞く—大阪大学の思い出—」『大阪大学経済学』59(4):125-135 を参照。



チストとして有名な方で、『日本エスペラント運動人名事典』にはかなり詳しく記されている。宮武正道(1912-1944) はわずか 32 歳の若さで夭折した石濱シューレの一員である。大東亜語学叢刊の『マレー語』を執筆し、亡くなったときには石濱が追悼文を書いている。エスペランチストでもある。

岡崎精郎(1920-1993)は京大東洋史出身で、阪大助手のあと、1966 年からは追手門学院大学に移り、亡くなるまで追手門学院大学に務めた人である。博士論文『タングート古代史研究』は京大東洋史研究叢刊の 1 冊として 1972 年に刊行されている。西夏研究の関係で、ネフスキーについても「ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯」をまとめている。また石濱文庫の整理をおこない、「大阪東洋学会より静安学社へ—大阪学術史の一こまとして—」「石濱・石田博士学術交流記録抄」(正・続) など、学術史にも関心を寄せている。石濱シューレをまとめるうえで、欠かせない情報を提供している。

高橋盛孝(1899-1980)は静安学社を石濱やネフスキとともに創設した人である。もともとは東大支那哲学科を出た後、京大大学院時代にネフスキからロシア語を学び、1926 年から関西大学に務めていた、石濱シューレの番頭役である。ネフスキの影響からか、1928 年ごろからアイヌ語やギリヤク語の調査をおこない、大東亜語学叢刊の 1 冊として『樺太ギリヤク語』(1942 年)、また『北方諸言語概説』(1943 年) を出版している。例会での発表「パレオアジア語及びアメリカ語に於ける接詞について」は後者の業績をまとめたものであろう。

中井玄英<sup>26</sup>は龍谷大学教授だった方で、「カッシラーの言語論」「言語記号の性質」といった論考を発表している。廣瀬捨三(1911-2002)<sup>27</sup>は関西大学の学長を務めた方で、チョーサーの研究で知られている。石本健は要覧の名簿によると京大教授で、「古代フィノウグリア語族に於けるアクセント様相の一考察、ペルム諸語の語派的所属及び移動アクセント存在の仮説」を『言語研究』に掲載しているが、詳細はわかっていない。国分敬治(1907-1997)<sup>28</sup>は日本の古代ギリシャ思想研究者で南山大学名誉教授、例会で二度発表をしている。エスペランチストとして、『日本エスペラント運動人名事典』にも立項されている。奥村正太郎は『音声学協会会報』に「標準語の構成音を東京音を以て表現するとき統一性を缺く場合に關する考察」(1943 年)を発表している。それ以上のことはわかっていない。要覧の名簿には奥村の名はない。

泉井久之助(1905-1983)は京都大学の言語学講座の教授である。この時期、メイエ・コアーン編『世界の言語』の翻訳をおこなっていて、大阪言語学会の会員から翻訳の協力を受けていたので、1942 年 12 月に仏印視察に行った旅行記を例会で発表したものと思われる<sup>29</sup>。

以上が、戦前の例会での発表者である。4 度も発表している舛田武雄の詳細がわからないのが残念である。

つぎに、戦後の発表者をみておこう。

---

<sup>26</sup> 父・中井玄道(1878-1945) は『日本エスペラント運動人名事典』に立項されているが、息子は立項されていない。中井玄道文庫も中井玄英文庫も龍谷大学に収められている。

<sup>27</sup> 鶴飼香織(2003)「廣瀬文庫ご紹介」『図書館フォーラム』8 号によった。廣瀬文庫の『万葉集』は「仙覚本系とは系統の異なる非仙覚本」で、非仙覚本系では唯一の全巻揃った写本であることが判明したため、平成 5 年に新聞紙上等で発表され大きな話題をよんだ」という。

<sup>28</sup> ウィキペディアに掲載されている。

<sup>29</sup> 泉井の翻訳した『世界の言語』については長田(印刷中)を参照。また、泉井と石濱の交流については玄幸子(2021)「書簡から見る石濱純太郎と東洋言語学者たち—泉井久之助ほか訳著『世界の言語』編纂過程を取り上げて」国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程」のレジユメが詳しい。遠からず論文として出版されるはずである。

伴康哉(1918-2013)は大阪外大でアラビア語を教えていた方で、三度例会で発表している。芝田稔(1916-2007)は関西大学で長く中国語を教えた方で、伊地智善継(1919-2002)は大阪外大で長く中国語を教えておられ、大阪外大の学長を務めた方である。後に発表した辻本春彦(1918-)は伊地智と同時に大阪外大を退官した中国語学者である。例会での発表者は大阪外大関係者が圧倒的に多く、富田竹二郎(1919-2000)はタイ語を長く教えておられ、村田忠兵衛はインド学を教え、田中四郎(1921-2017)はアラビア語を教えていた。

一番の有名人と言えば、あの「象は鼻が長い」でおなじみの三上章(1903-1971)であろう。例会で、「敬語法について」「浜田「古代日本語」について」<sup>30</sup>「国語の現在動詞」と三度発表している。この当時八尾中学で数学を教えていた三上はどのような経緯で大阪言語学会で発表することになったのか。これも今後の課題である。

山岸光雄は'Haiku Transplanted, And...!'を東海大学の紀要に発表していることから、東海大学に務めておられたのであろう。松原八郎は大阪言語学会の幹事を務めた方で、エスペランティストとして活動し、1991年に「川崎直一先生の思い出」をエスペラント雑誌 *La Revuo Orienta* に発表している。蛭沼壽雄(1914-2001)は東大言語学科出身で1949年以来退職まで関西学院大学に務めた人で、授業では言語学、ギリシア語、ラテン語などを講じていた<sup>31</sup>。井上修については要覧名簿に所属が記されておらず、よくわからない。森一郎も残念ながら不明である。

岸本通夫(1918-1991)は福岡県生まれ。神戸三中、三高を経て、1942年東大仏文学科卒業。東大大学院、京大大学院で学び、神戸市外大、大阪市立大学、阪大、甲南大学で、主にフランス語を担当した。岸本が書いた本で、一番有名なものは『カラー版世界の歴史2 古代オリエント』(1968年刊行。河出文庫の1冊として現在も手に入る)であろう。本の著者名は岸本の名前だけが記されているが、1989年出版の河出文庫版以降でははっきりと分担執筆者名も記されている。『ユーラシア語族の可能性』(1971年)の著者紹介では「50か国以上の言語に通じる」と書かれている。要覧の備考に「昭和23年秋神戸言語学会が創立されたとき、大阪言語学会の名で、幹事川崎が祝辞を述べた」とあるが、神戸言語学会の創設者の一人がこの岸本通夫である。ただし、この要覧の名簿には岸本の名前はない。

稲葉正就(1915-1990)は大谷大学を卒業し大谷大学教授となられた方で、チベット語、チベット仏教の研究者である。昭和23年11月の例会での発表後、『古典西藏語文法要論』(法蔵館)を出版している。石濱が別に創設したウラル・アルタイ学会においても、西藏語関連の発表をおこなっている<sup>32</sup>。

以上が要覧に掲載された例会発表者である。

この要覧以降の例会発表者についてもみておこう。高倉克己は大阪市立大学で中国語を教えていた方で、石濱純太郎・川崎直一編集の『大東亜語学叢刊』の『北京語』の執筆予定者に名前がある。1942年当時は立命館大学教授だった。『蘇州日記』で知られ、1941年28歳で亡くなった高倉正三の兄である。

西田龍雄(1928-2012)は京都大学で長く言語学を担当し、チベット・ビルマ語研究や西夏語研究で名高い。庄垣内正弘による追悼文「西田龍雄先生の学問研究」によると、「大学時代に石濱純太郎博士か

<sup>30</sup> 濱田敦『古代日本語』大八洲出版。1946年刊行をさす。

<sup>31</sup> 蛭沼壽雄については「蛭沼教授の人と学問」『蛭沼壽雄教授還暦記念論文集』(1976)が以下のサイトで読むことができるが、それを参照した。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kamiyama/Hirunuma.html>

<sup>32</sup> 長田(印刷中)を参照。

ら西夏語研究の手ほどきを受け、一気に西夏語に傾倒されるのであるが、そこには大阪外事専門学校時代に専攻された中国語の素地が作用したと考えられる」とあるように、石濱純太郎の西夏語研究を受け継いでいる。西田が京都大学を卒業したのは1951年3月なので、この例会当時は大学院に入ったばかりである。「古代アルタイ語学」のタイトルからすると、まだ西夏語研究には本格的に着手していなかったのかも知れない。

## 6. おわりに

小論では『大阪言語学会要覧』を紹介し、大阪言語学会でどんな発表が行われたかをみてきた。

小論の目的はまだ石濱文庫で未発見の要覧を公開することにある。石濱シュレーの研究はまだまだ道半ばである。石濱シュレーに集う言語学者たちの研究紹介やその学問的な意味合いなどは今後の課題としたい。また、大阪言語学会例会の発表者について、まだまだわからない方々がいて、今後それを埋めていきたい。とくに、舛田武雄の発表をみると、蒙古字、契丹文字、パспа文字、元朝秘史など、石濱が得意とする分野での発表が多く、どんな人でどんな研究をおこなった方なのか、ぜひ調べてみたい。なお、父の遺品の中から、『大阪言語学会会報』も見つかっているが、これについては次号以降で紹介したい。

さいごに、印欧語研究の高津春繁が「学界展望—言語学」に大阪言語学会に触れた一文があるので、それを紹介しておく。

言語学的文法的研究は甚だ実証的で地味であつて、かつての発表に印刷技術上の多大の困難と費用とを要するために、発表すべき方法がない場合が多いので、この困難を打開するために各種の学会や研究会が作られることが望ましいのであるが、幸いにして漸次かゝる種類のもものが結成されつゝあり、それらの中には日本言語学会、日本音声学会の如き全国的組織のもの、国語学会、中国語研究会の如き個別言語を対象とするもの、大阪言語学会の如き地域的な研究者の集り、東大言語学研究室会の如き研究室中心のものがある。(高津春繁 1950:9-10)

東大の言語学科の教授を務めることになる高津が、「学界展望」の中で大阪言語学会に言及していることは注目に値する。しかし、二十一世紀の今、大阪言語学会の活動は日本言語学史から完全に消え去られている。この日本言語学史拾遺を通して、顕彰してみたい。

## 参考文献

吾妻重二編著(2019)『東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム論文集』関西大学出版部。

鵜飼香織(2003)「廣瀬文庫ご紹介」『関西大学図書館フォーラム』8:69-71.

英語青年(1942a)「片々録」87(6):189.

英語青年(1942b)「片々録」87(8):254

英語青年(1942c)「片々録」88(2):62.

英語青年(1942d)「片々録」88(4):125

英語青年(1943a)「片々録」89(4):94.

- 英語青年(1943b) 「片々録」 89(8):190.
- 英語青年(1946a) 「片々録」 92(6):191.
- 英語青年(1946b) 「片々録」 92(9):287.
- 英語青年(1946c) 「片々録」 92(11):351
- 英語青年(1947a) 「片々録」 93(1):63.
- 英語青年(1947b) 「片々録」 93(8):286.
- 英語青年(1948a) 「片々録」 94(2):62.
- 英語青年(1948b) 「片々録」 94(6):190.
- 長田俊樹(印刷中)「石濱シューレに集う人々ー四半世紀後に」『日本研究』
- 菅真城、阿部 武司(2010)「五島忠久名誉教授に聞くー大阪大学の思い出ー」『大阪大学経済学』  
59(4):125-135。
- 玄幸子(2021)「書簡から見る石濱純太郎と東洋言語学者たちー泉井久之助ほか訳著『世界の言語』  
編纂過程を取り上げて」国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程」発表レジュメ。
- 高津春繁(1950)「学界展望ー言語学」『人類科学』 3:1-10
- コトバ(1943) 「コトバ情報」 61-67 頁。
- 和田葉子(2008)「廣瀬文庫とチョーサーをめぐる本たち」『関西大学図書館フォーラム』 13:24-28.

大阪言語学会要覽

昭和24年4月

## 大阪言語学会々則

1. 本会は大阪言語学会 (Societas Osaka'ensis studiorum linguarum) と稱す。
2. 本会の目的は世間諸言語の研究に在り。
3. 本会は本会の趣旨に賛成する大阪附近在住の者を会員とす。  
入会せんと欲する者は幹事に許可を求められたし。  
退会せんと欲する者は幹事迄届出られたし。  
常会員に非る者も幹事の許可を得て会友として例会に出席するを得。
4. 本会は幹事二名を置き事務を處理せしむ。その任期は一年とし  
重任するを得。幹事の推挙は総会出席者による選挙多数決に依  
るものとす。
5. 本会の事業は概ね次の如し。
  - (イ) 総会 年度の初めに総会を開き事業報告役員選挙を行う。
  - (ロ) 例会 研究発表のため例会を開く。毎月の第二日曜日午後  
を通常とす。三月、七月、八月、十二月は例会を開かず。
  - (ハ) 出版 事業報告名簿；言語関係の編著等。
6. 会費は年百円とす。会費は入会と同時に一年分拂込むものとす。  
会費は返却せず。滞納一年以上に及べば退会せるものとす。
7. 本会の事務所は幹事宅とす。
8. 会則の変更は総会に於て出席会員過半数の決議によるものとす。

# 研究例会

## 創立総会並 第一回例会

昭和十七年二月十五日 稗徳堂にて

石浜純太郎 ツングース語族に就いて

川崎 直一 日本語で書かれた泰語獨習書

昭和十七年五月十七日

川崎 直一 エストニア語概説

梶田 武雄 蒙古字改良案をよんで

昭和十七年六月二十一日

五島 忠久 バンツ語について

昭和十七年十月二十日

岡崎 精郎 高昌行詔に就いて

梶田 武雄 契丹文字

高橋 益孝 パレオアジア語及びアメリカ語に於ける接詞について

昭和十七年十一月十五日

中井 玄英 言語構成観と言語過程観

広瀬 チョオサアの夢

昭和十八年四月十八日

石本 健 ハンガリー語について

國分 敬治 ギリシャイオニア方言について

梶田 武雄 蒙古錢とパスパ文字

昭和十八年五月十六日

石浜純太郎 元朝秘史の音譯

昭和十八年六月二十日

奥村正太郎 新日本表音文字

宗井久之助 佛印を見て

昭和十八年九月二十六日

石浜純太郎 ギリヤク語の研究と高橋先生の業績

川崎 直一 岡倉 について

高橋 益孝 ギリヤク語とその文献

辰 観 ギリヤク語研究資料

昭和十八年十月二十四日

國分 敬治 我國に於けるプラトン研究に対する一つの反省

石浜純太郎 劉 獻廷 の言語学

昭和十八年十一月二十一日

石浜純太郎 勞乃宣 の 言語学

梶田 武雄 元朝秘史に見ゆる色に就いて

昭和二十一年五月十二日

石浜純太郎 シロコプロフのツングウス字典

伴 康哉 セム語の語根に就いて

昭和二十一年六月九日

石浜純太郎 シナの梵語学

芝田 稔 シナの聲韻学研究

昭和二十一年九月十五日

石浜純太郎 中国の暹羅語学

伊地智善継 中国語名詞の接尾辞 兒と子

昭和二十一年十月十三日

富田 二郎 暹羅帰朝談

辰 観 西夏文法筆経展観

解説 石浜純太郎

昭和二十一年十一月十日

辰 観 梵文阿彌陀経展観

解説 石浜純太郎

村田忠兵衛 ブリハドデーヴァターに於ける語法思想

昭和二十二年四月十三日

石浜純太郎 Asia Polyglotta に就きて

三上 章 敬語法について

昭和二十二年五月十一日

山岸 光雄 アメリカ英語の歴史

料田 武雄 アフガニスタン蒙古語考

松原 八郎 ビルマ帰還談

昭和二十二年六月八日

石浜純太郎 緬甸譯語

三上 章 浜田「古代日本語」について

川崎 直一 服部四郎式ローマ字案について

川崎 直一 市河三喜博士記念論文集について

昭和二十二年九月十四日

蛭沼 壽雄 ギリシア語概観

井上 修 漢字の起源とその発展

辰 観 甲骨文字展観

解説 石浜純太郎

昭和二十二年十月十二日

岩本 通夫 ヒッタイト語概説

村田忠兵衛 パーニニの音論二三

昭和二十二年十一月九日

伴 康哉 アラビア語の数詞

岩本 通夫 続ヒッタイト語概説

昭和二十三年四月十一日

川崎 直一 ノヴィアールについて

山岸 光雄 イエスパーセンの

three-rank 説批判



昭和二十三年五月九日

辻本 春彦 王力の中国語についての新著  
 石浜純太郎 金剛経展観と解説  
 川崎 直一 新刊紹介

昭和二十三年六月十三日

田中 四郎 イスラム言語学  
 石浜純太郎 中国のエジプト学

昭和二十三年九月十二日

田中 四郎 エリアスの English-Arabic  
 Dictionary の新版  
 伴 康哉 アラビア語の接続法  
 石浜純太郎 久野文書研究予報

昭和二十三年十月十日

三 上 章 國語の現在動詞  
 森 一 郎 ローマンス語 雑考

昭和二十三年十一月十四日

稲葉 正就 西藏語について  
 石浜純太郎 西藏語文法書展観

## 備 考

昭和23年12月5日 關大天六校舎において 靜安学社  
 主催の石浜純太郎還暦祝賀茶話会に本会も合流した。

昭和23年秋神戸言語学会が創立されたとき、大阪言語学  
 会の名で 幹事川崎が祝辞をのべた。

本会は石浜純太郎の主唱により、石浜、川崎直一、五島忠  
 久を発起人として創立にいたつたものである。

幹事は創立から昭和22年度まで石浜、川崎の二人が當つ  
 てきたが、昭和23年から川崎、松原となった。

研究例会は、懷徳堂、高津中学、天王寺本坊、天王寺女学  
 校、その他などで行われたが、昭和24年4月からは大阪市  
 天王寺區上本町八丁目 大阪外専で行う予定。

会の記録一部紛失のため、初期の研究例会の記事を十分  
 傳えることができない。(例えば、進藤氏の「エスペラント  
 について」の講演時期)。

現在事務所 大阪市住吉区万代東二丁目 49

川崎直一 方

# 會員名簿 (順序不同)

✓ 精松 源一 大阪市住吉区阪南町 [ ] (大阪外專教授)  
 石濱 純太郎 大阪市住吉区墨江中 [ ] (關大教授)  
 笠井 信夫 奈良縣高市郡今井町 [ ] (大阪芸高教授)  
 川崎 直一 大阪市住吉区万代東 [ ] (大阪外事教授)  
 五島 忠久 大阪府阪急石橋 浪速高等学校内 (浪高教授)  
 佐藤 圭四郎 大阪市天王寺區 [ ]  
 澤 英三 兵庫縣芦屋市芦屋 [ ] (大阪外專教授)  
 中井 玄英 大阪市東淀川区南方町 [ ] (龍大講師)  
 伴 康哉 堺市永代町 [ ] (大阪外專助教授)  
 藤 岡 常太郎 北区中ノ島朝日新聞社内 (校閲部長)  
 榊田 武雄 大阪市大淀区豊崎西 [ ]  
 村田 忠兵衛 大阪府豊能郡箕面村 [ ] (大阪外專講師)  
 山田 房一 大阪府中河内郡枚岡町 [ ] (大区入組)  
 進藤 靜太郎 西宮市甲陽園健康科学会館内  
 松原 八郎 大阪府岸和田市 [ ]  
 三上 章 布施市金岡 [ ] (山本高技教授)  
 出口 常順 大阪市天王寺区四天王寺境内 東光院  
 山岸 光雄 大阪市東住吉区複合町 [ ]  
 高橋 益寿 兵庫縣川辺郡園田村 [ ] (關大教授)  
 伊地智 善繼 大阪府北河内郡枚岡町 [ ] (大阪外專教授)  
 宮本 幸三郎 京都市左京区若王子町 [ ] (大阪外專講師)  
 蛭沼 壽雄 大阪府中河内郡松原町 [ ] (關西学院大助教授)

井上 修 大阪府泉南郡信達町 [ ]  
 金戸 守 大阪市浪速区大石町 府立今宮中学校内  
 宇野 章 兵庫縣川辺郡川西村 [ ] (大阪外專助教)  
 田中 四郎 高槻市 大阪外事内 (大阪外專助教)  
 富田 竹二郎 神戸市生田区元町 [ ]  
 笹部 健三 豊中市櫻塚元町 [ ] (大阪外專 )  
 貫名 美隆 神戸市須磨区 [ ] (神戸外專教授)  
 西田 龍雄 阿倍野区相生通 [ ]  
 服部 正一 奈良市 [ ] (大阪外專講師)  
 長田 夏樹 神戸市須磨区禪昌寺町 [ ]  
 松本 清  
 泉 井久之助 京都市上京区紫野 [ ] (京大教授)  
 藤 枝 了英 堺市九門町東 [ ]  
 市川 隆二 京都市東山区粟田口 [ ]  
 松木 泉 京都市東山区新門前 [ ]  
 園分 敬治 京都市一乗寺 [ ]  
 今川 太郎 兵庫縣武庫郡御影町 [ ]

## 死亡會員

宮本 到 龜田 次郎  
 宮武 正道 大島 伸太郎

山	勝	武	子	吹田市川西町	■■■■	
石	本		健			(京大教授)
稻	斐	正	純	大阪市北区此花町	■■■■	(大谷大)
多	賀	敏	大	大阪市東淀川区三国町	■■■■	
池	川		清	大阪市他所民生局内		(調査課長)
片	岡		安	大阪外専办		(外専助教授)
芝	田		稔	大阪府南河内郡長野町	■■■■	
森		一	郎	大阪市西成区	■■■■	
池	田	洲	應	大阪市天王寺区元町	■■■■	
花	谷	實	輝	大阪府南河内郡彼方港路山	■■■■	
岡	崎	精	郎	豊中市新庄	■■■■	
笠	谷	良	造	奈良市交蓮山赤町	■■■■	